

令和6年度 奈良市立都跡こども園 研究実践概要

園長名 近江 弥生
全園児数 139名

1. 研究主題 “とことん”遊び込む子どもを目指して
～遊び込むための具体的な援助を探る～

2. 研究年度 3年度

3. 研究主題設定理由

前年度までの研究で、“とことん”遊び込む子どもを育むには、一人一人の自発的な考えや思いを受け止め、友達と一緒に試行錯誤していく姿を支える保育者の存在の大きさを実感した。そこで、より遊び込む姿につながる、保育者の援助はどのようなものかを探り、園全体で子どもの成長を支えることにつなげていきたいと考えた。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・遊びの中で、子ども達が身近な環境に主体的に関わる姿から、“とことん”を引き出す保育者の援助を考え、とことん遊び込む子どもを育てる。

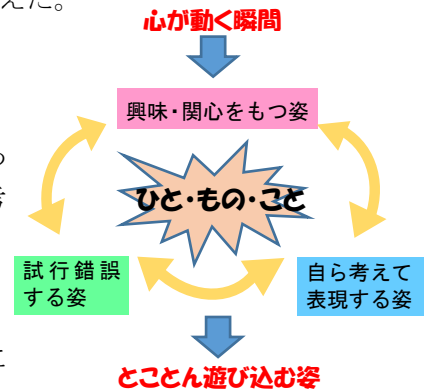
②研究の重点

- ・子ども達の学びを読みとり、子ども理解に努める。
- ・事例や遊びの写真、でいあシートを元に、とことんにつながる保育者の援助について探る。

③活動の方法

- ・各学年の実践事例から、遊び込んでいく子どもの姿を3つの姿（興味・関心をもつ姿、自ら考え表現する姿、試行錯誤する姿）に分けて捉えた。そして、その姿の要因となる保育者の援助とその意図を分析し、以下のように表記した。

興味・関心をもつ姿	自ら考えて表現する姿	試行錯誤する姿
保育者の援助	意図	①=保育者



事例1 「落ちたらサメに食べられちゃう」 3歳児1月

①が用意しておいたS棒を使ってジャンプすることを楽しんでいる。A児が50cm程の間隔をあけて並べてジャンプし始めた。①が見守る中、しばらく繰り返し遊んだ後、B児がS棒を2本平行に並べてつなげた道を作り始めた。体の向きを横にして歩いたり、①と手をつないだりしながら進んでいる。その中で、B児「先生...落ちたらサメに食べられちゃうねん」と①に向かって言ったので、①「そうなの？じゃあ落ちたら先生がバクッてするね」と言うと、B児はとうなずいた。B児は横向きに歩きながらもバランスを崩し、落ちて①に捕まると「食べられた～」と笑いながらスタートに戻る。「怖いよ」と言いながら慎重に歩くC児や「何しているの？」と並んでいる友達に尋ねて、遊びに加わるD児もいた。

- 寒い中でも体を動かして遊んでほしい、自由にS棒を並べて遊ぶことを楽しんでほしい
- 安全に遊べるように様子を見たい。また、したいことができるようにしたい
- 難しそうにしているところは支えて、やってみようとする気持ちを大切にしたい
- 子どもの考えを認め、楽しんで遊べるようにかかわりたい

【事例1 考察】

S 棒を使って自分達でつくった道で、跳んだり歩いたりすることを楽しんでた。子どもが使いそうな用具を用意したことで興味をもち、次はこうしてみようと考えながら遊んでいたと考えられる。また、保育者に見守られたり、直接的な援助を受けたりすることは安心してやってみようとする姿、自分の考えを保育者に受け止めてもらうことは自分なりに考えて遊ぶ姿につながった。以前、S 棒を用意した時には、繰り返しジャンプできる道で、跳ぶことを楽しんでたが、今回は子どもの考えに応じ、保育者がかかわることで、周りの子どもも興味をもち、かかわりを楽しみながら一緒に遊ぶ姿につながったと考えられる。



事例2 「画用紙食べた？」 4歳児6月

園庭で見つけたカタツムリを事前に用意していた飼育ケースに入れて持ち歩いていた。カタツムリをケースから出し入れして友達に見せている間に飼育ケースの蓋が見当たらなくなった。A児が蓋の代わりに側にあった画用紙を蓋にした。「いいやん」とそばにいた子どもも①と共に見守った。すると、カタツムリが画用紙の上を逆さまになって歩き出した。「見て！落ちない」「すごいな」と口々に話し始め、①「本当やね。落ちないね」と一緒に不思議がった。飼育ケースの蓋は見つからず、画用紙を蓋にして1日を過ごした。

翌日、画用紙の蓋を開けると裏が毛羽立ち、ざらざらになっていることに気づき、B児「見て！ギザギザになってる。なんで？」C児「迷路みたい」と言った。①「本当やね。何でやろ？」と問いかけると、A児がケースの中を覗き「白いうんちある」と見つけた。カタツムリは食べた物でうんちの色が変わるということを知っていたD児だが、「これはわからん」と言って白い塊を指さしている。しばらくすると、D児はケースの上に置いていた画用紙を持ってきて、「見て！ここ穴開いてるやろ」と見せた。そばにいた子ども達も「カタツムリが画用紙食べた」「本当や！」「お腹痛くない？」と言ってカタツムリをじっと見ていた。①「D君がもってきてくれた画用紙に穴開いてるね。カタツムリが食べたのかもしれないね。お腹痛くならないといいね」と子どもの思いや考えに共感した。



一緒に観察しながら興味を探りたい

画用紙の上を逆さまに歩くカタツムリを見て不思議に感じていたため、子どもの思いに寄り添って見守りたい

カタツムリの生態に興味をもってほしい



知っていることや気付いたことを友達に伝える姿を大切にしたい

【事例2 考察】

自分で見つけたカタツムリということで、じっくりと、よく観察し、好奇心を膨らませて気づきを深めていた。子どもがカタツムリに興味をもち不思議さを感じる姿に保育者が共感し、見守ることで、生態への興味をもった。保育者がさらに興味をもてるように問いかけると、知っていることや感じたことを知らせたり友達とやりとりをして、自分なりの考えを言葉にしたりしていた。その個々の考えや気づきを保育者が認め、考えをわかりやすく他児に伝えることで、友達の思いを理解しながら、カタツムリへの愛着をもつことにつながったと考えられる。

事例3 「先生みたいな泡ができた」 5歳児6月～7月

石鹼を使っての泡遊びを楽しんでいる。最初は石鹼そのものと水を混ぜたり、手で石鹼を泡立てて泡をつくったりして遊ぶことを楽しんでた。以前、おろし器を使って梅をおろし、水を混ぜてとろ



とろにしていた経験もあり、道具の中から見つけたおろし器を使って石鹼を削り、粉状にし始めた。最初は粉状にした石鹼に水を混ぜ、泡だて器を使ってかき混ぜて泡ができることを楽しんでた。ただ泡といっても泡立った水のような泡だった。

数日後、その様子を見ていた㊦も一緒に石鹼を削って泡立て、ボウルから落ちない固い泡をつくって見せた。「すごい！」「見せて」「触らせて」「どうやってやったん」と、驚いたように泡を触ったり見たりしていた。すると、㊦がつくる様子を見ていたA児は「水をちょっとにしたらいいいんちゃう？」「やってみよ」と、石鹼を削り始め、計量カップで水の量を調整しながら混ぜ始めた。「固まってきた」「でも泡にならない」「なんでなんやろ」と言いながら混ぜ続けていた。㊦「もうちょっと水を入れてみたら？」と言うと「これくらいかな」「まだ入れて大丈夫なん？」と、言いながらA児は少しずつ水を入れながら泡だて器で混ぜていた。A児の様子を見ていたB児「先生みたいな泡になってきた」と、A児のつくった泡と㊦がつくって見せた泡が同じようになったことを知らせにきた。㊦が見に行くと、A児は嬉しそうに混ぜて見せた。「本当やね」「すごい！ボウルから落ちないね」と、㊦がA児のつくった泡を触っていると、他児も集まってきてみんなで触ったり見たりしていた。周りで石鹼を削ったりシャバシャバの泡を作ったりしていた子どもたちが「私もやってみたい」とボウルから落ちない泡づくりを始めた。



子ども達がつくっている泡は、泡立った水のようなので、泡遊びの新たな刺激になってほしい

思うように泡づくりが進まないが、諦めずに続けているので、アドバイスしてみよう

A児が落ちない泡をつくったことを認め、できたことを他児にも気付いてほしい

事例4 「シャボン玉ができた」 5歳児7月

数日後、石鹼での泡遊びを楽しんでいる中で、削った石鹼に水を入れて混ぜていたC児。その様子を見ていたD児「ちょっと触らせて」と、石鹼水に手を入れ指で輪をつくりフーッと吹くと泡がシャボン玉のように落ちた。「シャボン玉できた！」と嬉しそうな声を聞き、近くにいたE児がワゴンに置いてあった、網が取れた茶こしを持って来て、石鹼水の中に入れて、フーッと吹いた。「あ！シャボン玉できた」「すごい！」と大喜びの子ども達。茶こしを交代で使ったり指で輪をつくったりしながらシャボン玉ができることを楽しんだ。㊦が金魚すくいのポイに紙がついていないものやうちわなどを数個用意すると、それらの用具を使ってシャボン玉ができるかどうかを試していた。「Cちゃんの方(石鹼水)はシャボン玉、めっちゃできる」「こっちのはあんまりできないなあ」「なんでやろ」と吹き、洗面器の石鹼水によって違いがあることに気付く子どももいた。「そうなの？」「やってみよう」と㊦も子ども達と一緒に数個の洗面器の石鹼水を使ってシャボン玉づくりをした。繰り返しシャボン玉づくりをしているうちにA児「水が多いんじゃない？」C児「石鹼と水入れたらまたできるかな」と気付いたことを話していた。F児はうちわでシャボン玉をつくらうとして何度もトライで石鹼水をつくるが、泡だらけになったり、水が多すぎたりしていた。なかなかシャボン玉ができず、F児「何回つくってもシャボン玉ができない」と悲しそうな表情で㊦に訴えにきた。㊦は食器用洗剤や洗濯のりなどを準備し、F児と一緒に軽量カップで測ってシャボン玉液をつくった。「わあ！これ、めっちゃシャボン玉できる！」と、



シャボン玉遊びをもっと楽しめるようにしたい

子ども達が感じている石鹼水の違いを保育者も感じたい



石鹼だけでは思うようにシャボン玉ができず悲しそうなF児だが、存分にシャボン玉遊びを楽しんで欲しい

嬉しそうにするF児。大きなシャボン玉がたくさんできる様子を見た他の子ども達が、ポイだけでなく砂場の道具の中から「これもできるかな」「これはどうかな」と、穴あきお玉やフライ返し、ザルなどを持ってきてシャボン玉ができるか試す姿も見られた。



【事例3・4 考察】

石鹸を泡立てて泡になったことに興味をもち、以前の経験を思い出しおろし器で削って粉状にしたり、道具を使って少しずつ水を入れて混ぜたりするなど、自分たちなりの方法で石鹸と関わり、心が動かされていった。新たな刺激になるようにと保育者が固い泡をつくって見せたことで、「同じような泡をつくりたい」という思いの実現のために試行錯誤する姿が見られた。また、シャボン玉が偶然にできたことが新たな刺激となり、考えを伝えたり、不思議に思ったりしながらシャボン玉をつくりたいという目的に向かっていった。その中でシャボン玉がうまくできないことを受け止め、保育者が洗剤などを使ってシャボン玉液をつくったことが、自分たちでできる道具はないかと試す姿に繋がった。

5. 研究の成果

子どもはしてみたいと興味・関心をもったことに、自ら考えて表現しながら試行錯誤して、とことん遊び込んでいく姿が見られていた。

3歳児は、身近にあるものや目で見てわかる状況に心を動かされ、興味・関心をもって遊んでいた。その興味・関心をもっているところに保育者の存在があることで自ら考えて表現する姿につながっていった。保育者が一緒に遊ぶ、また、そばにいる安心感や何かあったときには保育者と共有できるという距離感が遊びたい気持ちを高めていくと考えられる。そして、子どものまともきらない言葉や思いを保育者が代弁したり具体的な言葉にしたりすることで、自分のしていることが明確になり、とことん遊ぶ姿につながると捉えた。

4歳児は、自然現象や生き物の予想できない動きが要因となり、“楽しそう”“なぜ？”と心が動かされていた。そして、一緒に遊ぶ友達や保育者に自分の思いや気付きを知らせながら遊ぶ中で、一人一人の考えや気付きを保育者が認め、他児と共有することで、友達の意見への理解ができたり、遊びの方向性が揃ったりして、遊びが深まっていった。そうした保育者の問いかけや共感があることで、“もっと知りたい”“どうなるのだろう？”と感じたことを繰り返し試すことにつながり、気付きや知識を得て遊び込んでいくと考えられる。

5歳児は、興味をもったことを楽しむ中で、保育者や友達から気付かされた新たな視点や刺激が次の展開へとつながり、自ら考えて表現する姿につながっていった。目的や考えがはっきりしているため、自分や友達の行為によって状況が変化することで、新たな気付きを得ることができ、さらに“こうしたらどうなるだろう”“もっとこうしないと”と目的に向かうためにどうするかを考えていた。そのため、遊びの一員としての保育者の存在や用具の準備等による援助も必要であるが、友達と目的をもって刺激し合いながら、試行錯誤して気付きを深めていく作用も大きいと考えられる。

6. 今後の課題

保育者がそばにいる安心感や遊びの一員となってかかわることがとことん遊ぶ姿につながっていたが、子ども達は友達の姿にも刺激を受けて様々なアイデアが湧き、してみたい気持ちが高まっていた。様々な物事が要因となって遊び込む姿につながると考えられるため、友達間のかかわり等にも着目して、子どもの姿や心を動かされる要因について検討することで、自分達で遊びをつくり進め、とことん遊び込む面白さを味わえるようにしていきたい。